

日本語の態体系の最適性理論的分析の可能性について

ルディ トート
Rudy Toet

1 はじめに

本稿では、日本語の態(ヴォイス)体系の一部の最適性理論(Optimality Theory—以下 OT)的分析について考える。主に、同一の参与者名詞句及び動詞語幹を含む能動文(1a)と二受動文(1b)の間の選択及び二受動文の成立条件について考えるが、最後にニヨッテ受動文(1c)についても簡潔に触れる。

- | | |
|--|---------|
| (1) (a) NP ₁ がNP ₂ をVした。 | 能動文 |
| (b) NP ₂ がNP ₁ にVされた。 | 二受動文 |
| (c) NP ₂ がNP ₁ によってVされた。 | ニヨッテ受動文 |

次の例に示されるように、受動者名詞句の指示対象が非情(無生・inanimate)物である場合は、それを主語とする二受動文はある条件を満たさなければ許容されない¹。

- (2) (a) *開会が議長に宣言された。
(Kuroda 1979[1992: 187]) 非情物主語の二受動文
- (b) 大切なお金が泥棒に盗まれた。(益岡 1991a: 197) 潜在的受影者受動文
- (c) この小説は漱石に激賞された。(益岡 2000: 57) 属性叙述受動文
- (d) 山田投手が投げた外角低目の速球は、玉に高々と打ち上げられ、外野席を越えて場外に出るホームランとなった。
(久野 1986: 79-80) 複文における受動節
- (e) そんな、誰に書かれたか解らないような手紙は、破って捨てなさいよ。
(久野 1986: 81) 受動主語関係節
- (f) 砂浜の上に引き上げられた漁船が、月光に照らされて……。
(益岡 2000: 64—『草の花』による) 全参与者が非情物である二受動文

¹ 詳細については、トート 2011 を参照されたい。

益岡(1982, 1991a, 2000)によると、非情物名詞句を主語にする特定の動機付けがなければ、二受動文は成立しないのである。十分に動機付けられている非情物主語の二受動文の例として挙げているのは、(2b)の「大切なお金」の所有者などのような、非情物名詞句の指示対象に何らかの形で関連している人物の受影性を含意する「潜在的受影者受動文」や、(2c)の「この小説」の質や評判のような、非情物名詞句の指示対象について何らかの有意義な属性を含意する「属性叙述受動文」(Kuno 1990、高見 1995 も参照)である。また、久野(1986, Kuno 1990)は、非情物主語の二受動文(節)が適格となる他の場合として、複文で複数の節が主語を共有する場合(2d)と主語関係節(2e)を挙げている。主語と共に二名詞句の指示対象も非情物である二受動文(2f)も適格性が増すとされる(高見 1995: 105-8、益岡 2000: 63-4)。同一の参与者名詞句を含む能動文と二受動文の間の選択の OT 的分析からは、少なくとも、これらの事実に対する説明が求められる。

目標としては、二受動文の成立条件をなるべく OT の仮定する文法の装置を用いてとらえて、形式と意味に関する(i)の前提と両立する形式的な分析にしたい。なぜなら、アドホックな仮定を加える必要が生じない限り、そうした分析が経済的であると考えられるからである。

- (i) 日本語における動詞の受動化(あるいは、統語論的枠組みによっては、受動動詞を含む構造の選択)は、
- (a) 文の表層構造において直接見える変化、すなわち、対応する能動動詞が主語に取るものと異なる非動作主的な主語を取るようになること、それに付随する格標示²と語順の違い(そして統語論的枠組みによっては必要最小限の構造的相違)、さらに対応する能動動詞が主語に取るものの明示が随意的になること以外には、形式的変化を伴わない。
 - (b) 対応する能動動詞が主語に取るものが任意に明示されなくなり、項の数が減り得ること以外には、真理条件的意味の変化を伴わない。

具体的に述べておこならば、能動文より受動文が、また、有情物主語より非情物主語が有標であると仮定し、潜在的受影者の受影性の叙述や属性叙述のような正当な理由がない限り、わざわざ有標な受動態を用いて、非情物名詞句が主語になるという有標な状況をもたらすことが許されないという仮説の OT 的形式化を試みる。この仮説自体は益岡の仮説に基づく。(i)に従った分析とするため、潜在的受影者の受影性や主語の指示対象の属性は、文脈で明示的に表され

² 受動化が直接格標示を変え、その結果として文法役割も変わるという考え方も可能であるが、本稿では主語という文法役割を中心とする考え方を採る。

ていなければ、推意 (implicature) としてとらえる。この点では、二受動文が能動文に表されない受影性を埋め込み文構造により真理条件的意味として表すとする北川と黒田 (Kitagawa & Kuroda 1992: 53-4) とは違う立場を採る。このような推意を含む受動文の成立と、複文における受動節及び受動関係節の成立は、いずれも主語の指示対象の主題性に関連付けて説明する。主語と二名詞句のそれぞれの指示対象が両方とも非情物である場合は、結果として非情物主語が現れることが避けられないということが他の場合との重要な違いとなる。

第 2 章ではまず、有標性という概念をどう見るか、そして有情性とその他の概念が有標性にどう関係するかについて述べ、OT を導入する理由を説明する。紙幅の関係で OT の基本の説明は割愛するが、OT 統語論の特色及び本稿で標準 OT の原理から逸脱する可能性のある点には言及する。第 3 章では、Aissen と Bresnan, Dingare & Manning の OT 統語論の枠組みを用いた態の汎言語的分析を紹介する。第 4 章では、Bresnan, Dingare & Manning の英語の態体系の分析が基本的に日本語にも適用できるとした上で、二受動文の成立条件を OT でとらえる提案をする。なお、本稿で一部の二受動文が表すと仮定する推意が解釈過程においていかに導出されるかについて、双方向的 OT の枠組みを用いて考察する。最後に、二受動文とニヨッテ受動文との成立条件の違い、その説明、そしてそれを OT でどのようにとらえることができるかについて触れる。

2 有標性と OT 統語論

2.1 有標性について

OT は「様々な点で有標性の形式的理論である」(‘is in many respects a formal theory of markedness’—Aissen 1999: 674 による Paul Smolensky の引用)。前章で述べた通り、本稿の考察においても、名詞句及びその指示対象の性質とその名詞句が担っている文法役割との組み合わせに有標なものと無標なものがそれぞれあるということが前提となるので、まずは Givón (1995: 第 2 章) の考察を参考に有標性という概念自体がどのようなものであるかについて考えることにする。

Givón によると、ある領域の範疇が互いに非対称的關係にあって、ある範疇が「普通」であり、ある範疇が「特殊」であるという概念は古代より言語学的思考に潜在している。しかし、有標性という概念は、ただこうした直感をとらえただけのものではない。Givón は、言語の一般的な傾向として次の三つの尺度が相関関係にあり、その相関関係は言語学において説明されるべきであるとしている。

- (ii) 構造的複雑性 (structural complexity)
無標な構造より有標な構造が複雑である傾向がある。
- (iii) 頻度分布 (frequency distribution)
無標な範疇より有標な範疇が出現頻度が低い傾向がある。
- (iv) 認知的複雑性 (cognitive complexity)
無標な範疇より有標な範疇が精神的労力 (mental effort)、注意要求 (attention demands)、あるいは処理時間において認知的に複雑である傾向がある。

認知的複雑性以外にも、伝達の要因、社会的及び文化的要因、そして神経学的及び生物学的要因を有標性の「実質的原因」(substantive grounds)として挙げている。本稿のテーマに関連することとしては、これらの尺度から見て能動態より受動態が有標であるとも指摘している。

何が有標であるかは文脈あるいは環境による。Givón は、本稿で特に重要になる「環境」の例として、名詞句の文法役割を挙げている。主語として現れる場合はある種の名詞句が有標であるのに対して、非主語として現れる場合は別の種の名詞句が有標であるのである。例えば、Givón によると、主語は定 (definite) である場合が多いのに対して、具格名詞句は不定 (indefinite) である場合が多い。文法役割自体の間にも無標と有標の関係が成り立つ。すなわち、主語という範疇が無標であるのに対して、具格名詞句という範疇が有標であると言える。汎言語的に見てほとんどの文に主語があるのに対して、具格名詞句は出現頻度が比較的低いと言っていいだろう。また、有標な環境において無標で、無標な環境において有標であるものは一般的に有標であることになり、逆に無標な環境において無標であるものは一般的に無標であるということになる。例えば、連続的談話においては、不定物を指す名詞句より定物を指す名詞句の出現頻度が高くなる。

上の例では、主語と非主語の有標性の違い及び定と不定の有標性の違い、そしてその相関関係について見たが、定と不定と同様に有標性の階層を成し、文法役割と相関関係にあるものが先行研究においてかなり多く挙げられている。以下、これらを「有標性要因」と呼ぶことにする。例えば、次のような階層がある。

- (v) 有標性階層
 - (a) 有情 > 非情 有情性
 - (b) 一・二人称 > 三人称 人称
 - (c) 定 > 不定特定 > 不特定 定性

- | | | | |
|-----------|---|-------|-------|
| (d) 高い主題性 | > | 低い主題性 | 主題性 |
| (c) 新情報 | > | 旧情報 | 情報の新旧 |
| (f) 動作主 | > | 受動者 | 意味役割 |

(Givón 1995, Aissen 1999, 2003 に基づいて単純化したもの—他の出典についてもそれらを参照)

これらの階層では、左にあるものが無標で、無標である主語にふさわしいのに対して、右にあるものは有標で、文に現れるならば、主語より有標である目的語などとして現れることが無標な状況である。

どのような名詞句がどのような文法役割で現れるかによって有標性が変わることが文の形を左右する現象として、能動態と受動態の交替以外にも、例えば、様々な言語における分裂格標示 (split case marking—Aissen 1999, 2003) や、英語における与格交替 (dative alternation—‘NP₁ V NP₂ to NP₃’ と ‘NP₁ V NP₃ NP₂’ というパターンが交替する現象—Bresnan et al. 2007, Bresnan & Hay 2008) や属格交替 (genitive alternation—‘NP₁’s NP₂’ と ‘NP₂ of NP₁’ というパターンが交替する現象—Rosenbach 2008) が挙げられる。また、こうした有標性による文の形への影響は、統計的な傾向として現れる場合も、絶対的な制約として現れる場合もある。例えば、ラミ語 (Lummi) では、動作主が一・二人称で、受動者が三人称であれば、受動文を使うことができないのに対して、逆に動作主が三人称で、受動者が一・二人称であれば、受動文を使わなければならない (Aissen 1999)。英語ではこのような「固い制約」 (hard constraint) はないとされるが、前者のパターンの場合より後者のパターンの方が受動文の使用率が高い。つまり、ラミ語における「固い制約」に対して、英語では人称にかかわる「柔らかい制約」 (soft constraint) があるのである (Bresnan, Dingare & Manning 2001)。日本語の受動態に見られる有情性制約も、破っても構わない場合がある以上、「柔らかい制約」と呼べるだろう。また、久野 (1978: 145-52, 169; 1986) によると、人称や情報の新旧は日本語においても主語の選択、ひいては態の選択に影響する。久野はこの事実を視点ないしは共感度という概念を中心に説明しているが、有標性に起因する現象としてとらえることもできるだろう。他の様々な有標性要因についても、本稿では日本語における態の選択に有意な影響を及ぼすと想定するが、実際にそうであるかどうか検証する必要がある。Bresnan et al. (2007) 及び Bresnan & Hay (2008) のコーパス言語学的方法や Rosenbach (2008) の実験的方法を用いて検証可能であると思われる³。

³ 筆者は現在、この類のコーパス研究を準備中である。

2.2 OT 統語論について

OT の恐らく最も基礎的な原理は、複数の制約が序列を成し、順位の高い制約の違反を防ぐためなら、順位の高い制約の違反が許されるということであろう。したがって、OT は、潜在的受影者の受影性や主語の指示対象の属性を表すためなら、有標であり通常成立しないとされる非情物主語のニ受動文が成立するという仮説を形式化するのにふさわしいと思われる。OT の原理として、最も高い順位にある制約以外は、すべての制約が「柔らかい」のである。次章で見るように、OT では、(v)にあるような個々の有標性の階層に対応する形式的な制約が立てやすい。また、OT の他の利点として、言語によって序列が異なると仮定することで世界の言語の多様性が説明できる。仮定される制約の性質と可能な序列により、どのような言語が存在し得て、どのような言語が存在し得ないかが決まる。つまり、ある現象の分析によって、具体的な類型論も自動的に予測されるのである (Samek-Lodovici 2001 を参照)。

紙幅の関係で、OT 及び OT 統語論の基本の説明は割愛するが、後者の詳細については Legendre, Grimshaw & Vikner (eds.) 2001 が特に参考になる。本稿では、OT 統語論の評価 (evaluation) の入力としては次章で紹介する先行研究にならって述語項構造 (predicate-argument structure) を用いて、項のそれぞれの語彙的及びその指示対象の談話的特徴にもアクセスできるとする。出力の候補としては、便宜上、項の文法役割へのマッピングを用いる。また、考察を単純化させるために、出力の候補は、真理条件的意味が入力と一致するもののみ考慮する。その他の候補は真理条件的意味の相違を禁じる忠実性制約 (faithfulness constraints) によって排除されたとする。能動動詞の場合には主語が動作主であり、受動動詞の場合には非動作主 (本稿の例ではすべて受動者) であることも真理条件的意味の問題であるとする。格付与⁴も考察対象外とするので、各評価において能動文と受動文の二つの候補だけとなる。

二つの点において標準 OT の原理から逸脱した立場を採る。第一に、制約は厳密には必ずしも普遍的ではないとする。有標性の原因が部分的に人間の認知の本質にあるとされるため、前節で見た有標性による統計的傾向自体には普遍性があるだろうが、その反映である文法的制約は、統計的傾向から習得可能であるとする (Zeevat & Jäger 2002, Jäger 2004)。なお、3.3 節以下は、制約の「厳格支配」 (strict domination) の原理を廃棄する。詳細についてはそこで説明する。

⁴ OT を用いた日本語における格付与の先行研究としては、中村 (Nakamura 1999) の分析がある。

3 OT 統語論を用いた態の分析

3.1 Aissen の「固い制約」による態体系の分析

前章の有標性の説明に関連付けやすくするために、まずは Aissen (1999) の「固い制約」による態体系の分析を紹介する。詳細は割愛するが、Aissen は「調和的整列」(harmonic alignment) という手段を用いて、以下の(vi a)~(vi c)のような有標性階層をそれぞれ(vi d)の文法役割の有標階層と組み合わせ、(vii)のような有標性制約の部分階層(subhierarchy)を派生させる。便宜上、意味役割、有情性と人称の階層のみを対象とし、階層を Aissen のものから単純化するが、他の有標性階層に対応する部分階層を加えたり、制約を増やしても分析の基本は変わらない。

(vi) 有標性階層

- | | | | |
|-----------|---|-----|------|
| (a) 有情 | > | 非情 | 有情性 |
| (b) 一・二人称 | > | 三人称 | 人称 |
| (c) 動作主 | > | 受動者 | 意味役割 |
| (d) 主語 | > | 非主語 | 文法役割 |

(vii) OT 制約の部分階層

(「(非)主」は「(非)主語」、「1・2」は「一・二人称」、「3」は「三人称」、「動」は「動作主」、「受」は「受動者」の略)

- | | | | |
|-----------|---|--------|------|
| (a) *主/非情 | » | *主/有情 | 有情性 |
| *非主/有情 | » | *非主/非情 | |
| (b) *主/3 | » | *主/1・2 | 人称 |
| *非主/1・2 | » | *非主/3 | |
| (c) *主/受 | » | *主/動 | 意味役割 |
| *非主/動 | » | *非主/受 | |

(vii)は、(vi a)~(vi c)の左側にある無標な特徴を持つ名詞句が(vi d)の右側にある有標な文法役割を担うことを可能な限り避けるべきであること、そして、(vi a)~(vi c)の右側にある有標な特徴を持つ名詞句が(vi d)の左側にある無標な文法役割を担うことを可能な限り避けるべきであることを表す部分階層である。例えば、「*主/非情」は「非情物が主語になることを避けよ」ということを意味する。すなわち、有標な特徴を持つ名詞句が主語に、そして無標な特徴を持つ名詞句が非主語になるという、前章で見たように有標である状況を避けるべきとするものである。これらの部分階層の要素の相対的順位は普遍的であるとされ

る。つまり、特定の言語では、例えば「*主/非情」と「*主/有情」の間に他の制約が置かれていても構わないが、どの言語においても「*主/非情」が「*主/有情」より優位であるとされる⁵。Aissen の分析によると、(vii c)が受動態の一般的な相対的有標性の原因である⁶。

Aissen は、これらの仮定を用いて、固い制約による態体系を次のように分析している。上で見たように、ラミ語はこのような態体系を有し、動作主と受動者の間、一方が一・二人称で、他方が三人称であれば、一・二人称のものの方を主語にしなければならない。分析に直接影響しない制約及び説明の便宜上次節で紹介する「談話的際立ち」の制約を省略すれば⁷、次のような制約序列となる。下の(5)～(8)の評価表 (evaluation tableaux) から分かるように、「*主/1・2」と「*主/動」の相対順位はどの候補が最適になるかに影響を及ぼさないので、間に「≫」を入れない。

(3) 固い人称制約による態体系

*主/3 ≫ *主/受 ≫ *主/1・2, *主/動

Aissen が固い制約による態体系の実例としてラミ語を挙げているためここでも人称の制約による体系を例にするが、「*主/受」の左にどのような制約があるか、つまり、どういう点で有標な主語を避けるために受動態が選択されるかによって、2.1 節で見たどの有標性階層に支配される態体系でも同じように分析できる。例えば、有情性の固い制約による態体系を持つ言語は、有意でない制約を省略すれば、次のような序列となる。

(4) 固い有情性制約による態体系

*主/非情 ≫ *主/受 ≫ *主/有情, *主/動

ラミ語の態体系に代表されるような人称による体系の例に戻って、入力を単純化し、(3)の制約に関係する情報のみ指定すれば、このような制約序列を持つ

⁵ 2.2 節で述べたように、このような制約は統計的傾向から習得可能であると考えられる。Aissen の分析で普遍的に左の制約に支配される右の制約は、Zeevat & Jäger (2002: 4-5) が指摘するように、一般的な統計的傾向に反するので、そもそも習得されないと考えることが自然である。

⁶ 多くの言語と同様に日本語でも、形態的にも能動態より受動態が有標であるため、厳密には、Aissen (1999: 697-8) が分裂格標示の分析で用いる構造的複雑性を禁じる制約である「*STRUC」も考慮に入れなければならない。

⁷ 細部において Aissen (1999) のラミ語の分析と少し異なる Bresnan, Dingare & Manning (2001: 18-9) の分析を参考にしているが、分析方法は Aissen のそれと同一である。また、本稿では二項動詞の場合だけを対象としているので、例えば人称制約が有意である場合は「*主/3」と「*非主/1・2」が同じ候補を禁じるため、以下は便宜上主語に関連する制約だけを扱う。

言語において可能な評価が次の四つになる。ただし、ここでは日本語をメタ言語としてのみ利用し、日本語の態体系を描くものではないことに留意されたい。

(5) 動作主も、受動者も一・二人称の場合

V(動/1・2, 受/1・2)	*主/3	*主/受	*主/1・2	*主/動
☞主/動/1・2 - 非主/受/1・2 (能動文)			*	*
主/受/1・2 - 非主/動/1・2 (受動文)		*!	*	

出力例

- (a) 「僕が君を殴った」
 (b) * 「君が僕に殴られた」

(6) 動作主が一・二人称、受動者が三人称の場合

V(動/1・2, 受/3)	*主/3	*主/受	*主/1・2	*主/動
☞主/動/1・2 - 非主/受/3 (能動文)			*	*
主/受/3 - 非主/動/1・2 (受動文)	*!	*		

出力例

- (a) 「僕が太郎を殴った」
 (b) * 「太郎が僕に殴られた」

(7) 動作主が三人称、受動者が一・二人称の場合

V(動/3, 受/1・2)	*主/3	*主/受	*主/1・2	*主/動
主/動/3 - 非主/受/1・2 (能動文)	*!			*
☞主/受/1・2 - 非主/動/3 (受動文)		*	*	

出力例

- (a) * 「太郎が僕を殴った」
 (b) 「僕が太郎に殴られた」

(8) 動作主も、受動者も三人称の場合

V(動/3, 受/3)	*主/3	*主/受	*主/1・2	*主/動
☞主/動/3 - 非主/受/3 (能動文)	*			*
主/受/3 - 非主/動/3 (受動文)	*	*!		

出力例

- (a) 「太郎が次郎を殴った」
 (b) *「次郎が太郎に殴られた」

例えば、(6)のように、一人称の動作主の「僕」と三人称の受動者の「太郎」を項構造に含む入力では、三人称の主語を避けなければならないという制約が優位であるので、「僕」を主語とする能動態の候補が出力として選ばれる。一方、(7)のように、三人称の動作主の「太郎」と一人称の「僕」を項構造に含む入力では、同じ制約を守るため、「僕」を主語とする受動態の候補が選ばれる。この候補では「*主/受」という制約が破られるが、「*主/3」が優位であるので、その制約違反は許される。

しかし、単一の有標性要因によって態の選択が定まらない日本語や英語はおろか、これだけではラミ語の正確な分析にもならない。なぜなら、ラミ語でも、動作主も受動者も三人称である場合は、(8)の予測に反して、能動文も受動文も許容されるからである。態の選択が一見自由で、有標性階層の影響が統計的な傾向として現れる場合、または、潜在的受影者の受影性や属性の叙述による成立条件として現れる場合の分析も必要なのである。つまり、柔らかい制約として現れる場合の分析である。

3.2 Aissen の「柔らかい制約」による態体系の分析

Aissen (1999: 683-4; 687-9) は、Legendre, Raymond & Smolensky (1993) による態の OT 的分析に基づいて主題性、共感度、視点や談話一貫性という談話的要素を「談話的際立ち」(discourse prominence)としてまとめ、英語における能動態と受動態の間の選択が主にそれに支配されるとしている。前節で見た要因と同様に有標性階層(viii)を立てて、OT 制約の部分階層(ix)を派生させている。

(viii) 談話的際立ちの有標性階層

高い際立ち > 高くない際立ち

(ix) OT 制約の部分階層

(「X」は「高い際立ち」、「x」は「高くない際立ち」を意味する)

- *主/x >> *主/X
*非主/X >> *非主/x

(ix)は、主題性や共感度が高く、視点が近づけられているなどといった点において際立ちの有意に高い参加者が主語として、そしてそうでない参加者が非主語として現れることが無標な状況であるという一般化をとらえた部分階層である。

Aissen の分析方法⁸を採れば、英語とラミ語の制約序列は次のようになる。それぞれの態体系に有意でない制約は省く。

(9) 英語の態体系

- *主/x >> *主/受 >> *主/X, *主/動

(10) ラミ語の態体系

- *主/3 >> *主/x >> *主/受 >> *主/1・2, *主/X, *主/動

動作主も、受動者も三人称の場合のラミ語の評価表、つまり、(8)の修正は次のようになる。例では際立ちの高いことを代名詞の「彼」、そして際立ちの高くないことを固有名詞を用いることで表す。

(11) 動作主も、受動者も三人称で、動作主が際立ちが高い場合

V(動/3/X, 受/3/x)	*主/3	*主/x	*主/受	*主/1・2	*主/X	*主/動
☞主/動/3/X - 非主/受/3/x (能動文)	*				*	*
主/受/3/x - 非主/動/3/X (受動文)	*	*!	*			

出力例

- (a) 「彼が太郎を殴った」
(b) *「太郎が彼に殴られた」

⁸ 前節と同じく、Bresnan, Dingare & Manning (2001: 18-9) の分析も参考にしているので、詳細においては Aissen (1999) の分析と少し異なる。

(12) 動作主も、受動者も三人称で、受動者が際立ちが高い場合

V(動/3/x, 受/3/X)	*主/3	*主/x	*主/ 受	*主/ 1・2	*主/ X	*主/ 動
主/動/3/x - 非主/受/3/X (能動文)	*	*!				*
☞主/受/3/X - 非主/動/3/x (受動文)	*		*		*	

出力例

- (a) *「太郎が彼を殴った」
 (b) 「彼が太郎に殴られた」

(13) 動作主も、受動者も三人称で、どちらも際立ちが高くない場合

V(動/3/x, 受/3/x)	*主/3	*主/x	*主/ 受	*主/ 1・2	*主/ X	*主/ 動
☞主/動/3/x - 非主/受/3/x (能動文)	*	*				*
主/受/3/x - 非主/動/3/x (受動文)	*	*	*!			

出力例

- (a) 「太郎が次郎を殴った」
 (b) *「次郎が太郎に殴られた」

これらの評価表から分かるように、動作主も、受動者も三人称で、優位の「*主/3」によってのみ態の選択が定まらない場合には、順位が次である「*主/x」が決定的になる。(13)が示すように、その制約でも能動文と受動文の候補の違反数に差がなければ、「*主/受」が決め手となり、デフォルトとして無標である能動文が出力として選ばれる。

Aissenの英語の分析では、「*主/x」が制約序列の最高の順位にあるので、形式的には固い制約として働く。よって、形式的には、英語とラミ語は同じような態体系を持つことになる。「際立ち」の高さが語用論的要因などによるとされるため、表面的に能動文と受動文の間の選択が任意であるように見えるだけになるのである。他の有標性要因が柔らかい制約として働くように見えることは、それぞれの要因の際立ちとの相関関係に起因するということになる。

3.3 Bresnan, Dingare & Manning の推計学的 OT を用いた分析

Bresnan, Dingare & Manning (2001)は固い制約と柔らかい制約の違いを Aissen の分析と違う方法で分析している。すなわち、制約の順位が絶対的なものではなく、評価ごとに変動するとする、Boersma (例えば Boersma & Hayes 2001 を参照)の推計学的 OT (Stochastic OT) という OT 変種を用いる。標準 OT と異なる主な点は次の二つである (Bresnan, Dingare & Manning 2001: 21-3)。

(x) **連続的序列**

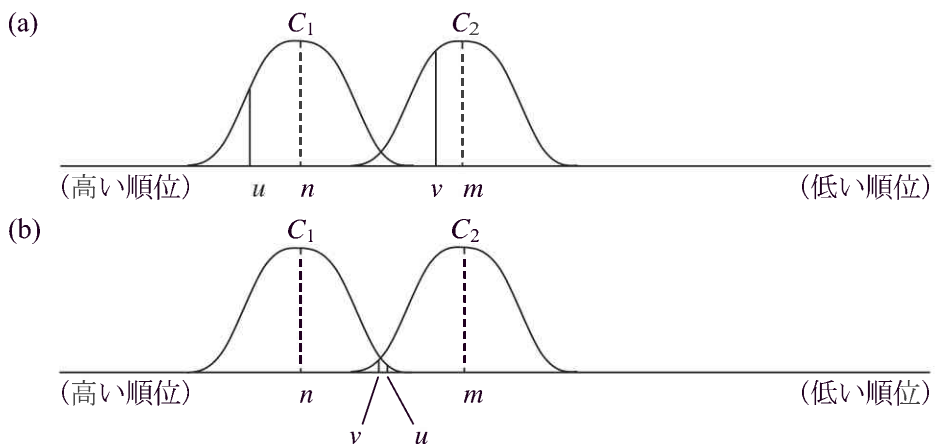
制約は連続的な序列に置かれている。制約の順位は序数ではなく実数 (以下では順位値と呼ぶ) で表され、制約の間に特定の距離がある。

(xi) **推計学的評価**

入力に対応する最適な出力の候補を選択する評価が行われる度に、制約のそれぞれの実数の順位値に、ノイズとして、平均値を 0 とする正規分布から無作為に取られた値が加算される。加算後、評価が行われ、出力として最適な候補が選ばれる。

つまり、実数で表された制約の順位は固定した順位ではなく、平均的な順位なのである。標準 OT をこの二点で修正することにより、序列における制約の間の距離が短ければ短いほど、その制約の相対的順位が評価において逆転しやすくなる。Bresnan, Dingare & Manning の分析ではこのことが固い制約と柔らかい制約の違いをとらえる鍵となる。同じ序列に基づく実際の評価における制約の順位逆転は、次のように可視化できる。

(14) **二つの評価における同一の制約序列**



(14)では横軸にある n と m が制約 C_1 と C_2 のそれぞれの実数の平均的な順位を表すが、実際の評価におけるノイズ加算の結果として、縦軸が表す確率で u と v のような異なる値となる。(14b)は制約の相対的順位の逆転の例である。

Bresnan, Dingare & Manning は抽象的あるいは複合的な「談話的際立ち」に基づく制約を想定せず、それより具体的な有標性要因に基づく制約のみを想定して、固い制約と柔らかい制約の違いをそれぞれの制約の順位値がどの程度離れているか、そして評価において事実上逆転し得るかどうかの違いとしてとらえているのである。「談話的際立ち」に基づく制約の代わりに、主題性(topicality)や情報の新旧(givenness)などの制約が考えられる。Aissen にならって部分階層にするなら、次のようなものになるだろう。

(xii) 主題性の部分階層

(「T」は「高い主題性」、「t」は「高くない主題性」を意味する)

*主/t >> *主/T

*非主/T >> *非主/t

(xiii) 情報の新旧の部分階層

(「新」は「新情報」、「旧」は「旧情報」を意味する)

*主/新 >> *主/旧

*非主/旧 >> *非主/新

Bresnan, Dingare & Manning の分析では、能動態と受動態の間の選択を左右する制約の順位値は、その選択への影響が大きければ大きいほど高いとされる。しかし、使用率への影響があっても能動文あるいは受動文の義務的使用が見られない制約は、その順位値が評価において「*主/受」の順位と逆転し得る値でなければならない。つまり、(14)の C_1 と C_2 と同じような関係にななければならない。一方、ラミ語の人称制約のような、能動態と受動態の間の選択を絶対的に支配する制約の順位値は、その他の有意の制約のそれを事実上逆転し得ないほど上回っているとされる。このような制約が、これまで「固い制約」と呼んできたものに当たる。

このような分析では、「*主/受」とその他の有標性要因の制約との相対的順位とその間の距離、そしてその通時的変化によって、ある要因が態の選択を絶対的に支配する固い制約になっていく慣習化(conventionalization)の過程がとらえられる。例えば、ラミ語と同じく海岸セイリッシュ語族(Coast Salish)に属するスクワミッシュ語(Squamish)では、動作主が三人称で受動者が一人称であれば、ラミ語と違って、そして英語と同様に、能動文も受動文も用いられるが、一人称の受動者を主語とする受動文を用いることの方が多いとされる(Bresnan,

Dingare & Manning 2001: 27-8)。これに対して、英語では、動作主と受動者が両方とも三人称である場合よりは受動文の使用率が高くなるものの、能動文の使用率を上回りはしない。「スクワミッシュ語でも、英語でも、人称制約の順位値が評価において「*主/受」の順位と逆転し得、同一の入力で能動文も受動文も最適となり得るが、英語よりスクワミッシュ語の方が人称制約の順位値が相対的に高く、受動文が最適となる確率が高い」というふうに、制約の柔・固だけでなく、柔らかい制約の強さの差異もモデル化できるということが推計学的 OT を用いた分析の魅力である。ある形式の適格性が具体的に程度問題として扱えるのである。また、Bresnan, Dingare & Manning は、同語族のラミ語とスクワミッシュ語がそれぞれ人称による態の選択への影響の絶対性の通時的変化の異なる段階にあると考えている。こうした通時的変化も、推計学的 OT に基づく GLA (Gradual Learning Algorithm・漸進的学習アルゴリズム) をもってモデル化できる。詳細については、Aissen が提唱したような制約部分階層の習得も扱う Jäger 2004 を参照されたい。

複数の制約の相対的な強さが言語によって恣意的に異なり得る、つまり、柔らかい制約でもその強さが恣意的に慣習化し得る特に強い根拠として、Bresnan & Hay (2008) のアメリカ英語とニュージーランド英語の与格交替を比較する研究がある。Bresnan & Hay は、コーパスを用いて、アメリカ英語でもニュージーランド英語でも様々な要因が与格交替に影響するだけでなく、アメリカ英語よりニュージーランド英語において有情性の影響が特に強いことを示している。同一の言語の二つの変種の間にも有標性要因の影響の強さの差異が現れることは、柔らかい制約の影響を一つの際立ち制約としてまとめてとらえる分析では説明できない。アメリカ英語とニュージーランド英語は、文を有標性要因の制約に従わせる態などの文法的手段はおおむね同じであるはずなので、一方におけるある制約の与格交替への影響が他方で代わりに別の文法的手段への影響として現れるといった説明は不可能であろう。

4 日本語への適用

4.1 非情物主語の二受動文の成立

ラミ語に見られるような固い制約がないとすれば、日本語における能動態と受動態の間の選択は、基本的には英語のそれと同様に分析できると考えられる。その選択が具体的にどのような有標性要因からどの程度に影響されるかは、2.1 節で述べたように、コーパスなどで検証されるべきだが、有情性、人称や情報の新旧など、様々な有標性要因から影響されるという仮定自体は十分な根拠が

あるだろう。非情物主語の二受動文が多くの場合許容されないことから、例えば英語より有情性の制約が強いとも言えそうである。なお、日本語における態の選択においてそれぞれの有標性要因による影響の強さが英語の与格交替の場合と同様に方言によって異なるかどうかを検証し、異なるのであれば別の説明が与えられないか検討する必要があるが、本稿では日本語の態において同様の慣習化があるということを経理にかなった想定と考える。したがって、前章で挙げた **Bresnan, Dingare & Manning** の柔軟な制約の分析の利点を踏まえて推計学的 OT の枠組みを採用し、主題性や情報の新旧のような個々の談話的要因を直接対応する個々の OT 制約としてとらえる。

日本語の態体系に **Bresnan, Dingare & Manning** の英語の態体系の分析を適用すれば、非情物主語の二受動文の成立条件をいかにとらえることができるだろうか。まずは、動作主と受動者がどちらも非情物である場合は、「*主/非情」の違反が避けられなくなるため、この制約による態の選択への影響が取り消される。能動文より受動文の方がその他の制約の違反が少なければ、受動者のみが非情物である場合より、参与者が両方とも非情物である方が受動文が最適な出力となる確率が増すと予測される。二名詞句が有情物である非情物主語の二受動文より、二名詞句も非情物である二受動文の方が適格性が高いと判断されるのは、このためであると考えられる。例えば、推計学的 OT の評価において「*主/非情」が「*主/t」より優位で、「*主/t」が「*主/受」より優位である場合を見てみよう。これら以外の制約は便宜上省略する。

(15) 動作主と受動者がどちらも非情物で、受動者が主題性が高い場合

V(動/非情/t, 受/非情/T)	*主/非情	*主/t	*主/受
主/動/非情/t - 非主/受/非情/T (能動文)	*	*!	
☞主/受/非情/T - 非主/動/非情/t (受動文)	*		*

出力例

- (a) * 「月光が漁船を照らした」
 (b) 「漁船が月光に照らされた」 (≈2f)

(15a)の「*」は、この文が日本語において不適格であることではなく、この文がこの評価において最適な候補として出力されないことを意味する。この制約序列では、動作主が有情物であれば、能動文の候補が「*主/非情」に違反せず最適な出力となる。

二名詞句の指示対象が有情物である場合には、非情物主語を他の節と共有する複文における受動節、主要部名詞の指示対象が非情物である受動主語関係節、潜在的受影者受動文、そして属性叙述受動文が適格となり、その他の非情物主語の受動文が不適格となるのは、主題性⁹制約の「*主/t」をもって説明する。まず、複文において、非情物受動者が他の節の主語の指示対象と同じである場合は、他の節も同じ参与者について情報を聞き手に伝えているので、その受動者が話し手にとって高い主題性を有する可能性が高くなると考えられる。話し手の伝達意図から見て実際にそうであれば、この非情物受動者を主語にし、受動節を用いれば、「*主/t」の違反を防ぐことができる。このように、主題継続性(topic continuity—Givón 1983: 24 を参照)に伴う主語継続性を維持することが「*主/t」の役割の一つとなる。これは基本的に久野(1986: 79-82)の説明を再解釈したものである。受動主語関係節については、主要部名詞の指示対象について情報を提供するということが関係節の機能であり(Kuno 1990: 61-2)、少なくともその関係節の中ではその指示対象が高い主題性を持つというのは自然な状況であろう¹⁰。その関係節の中の他の参与者が文全体や談話の文脈で特に高い主題性を有しない限り、受動関係節の使用がまた「*主/t」の違反を防ぐために必要となり得る。

上の説明では、「*主/t」の順位が評価において少なくとも「*主/非情」と「*主/受」のそれぞれの順位を推計学的に上回り得ると想定すれば十分であるが、潜在的受影者受動文と属性叙述受動文とでは、それぞれが含む推意の成立も推計学的 OT で「*主/t」をもって説明するならば、事実上絶対的に「*主/非情」と「*主/受」より優位を占めると想定しなければならないかもしれない。なぜなら、話し手が非情物受動者についての情報を推意として伝達しようとするのが OT 統語論の評価において高い主題性をもたらし、その非情物受動者を非主語にする能動文が「*主/t」に違反するのに対して受動文がそうでないために受動文が成立すると考えたいが、推計学的 OT の評価において「*主/t」より「*主/非情」と「*主/受」のどちらかが高い順位になれば、話し

⁹ ここでは、主題性という概念を話し手の意図から見た主観的な概念と見なす。すなわち、ある文においてどの参与者が高い主題性を有するかは、話し手の観点から、聞き手へ伝達しようとしている真理条件的意味及び推意が特にどの参与者について関連性の高い情報であるかによると考える。日本語の係助詞の「は」が「主題マーカー」とも呼ばれることによる曖昧性を避けるべく、「主題性」の代わりに金水(1990: 39)が使用する、話し手の観点を強調する「注目度・関心度」というような用語を使う方がいいかもしれないが、ここでは久野、Aissen と Bresnan, Dingare & Manning の言い方と一致させるために「主題性」という用語を用いる。

¹⁰ 久野(Kuno 1976: 427)は、主語が優位である Keenan & Comrie の関係節化の階層(accessibility hierarchy・汎言語的にどの文法役割が関係節の主要部になりやすいかを表す含意階層)をこの点に基づいて解釈している。

手の推意的意図の有無にかかわらず能動文が成立してしまうからである。これら以外の制約を便宜上省略すれば、次のような評価になる。

(16) 推計学的評価において「*主/t」が優位を占める場合

V(動/有情/t, 受/非情/T)	*主/t	*主/非情	*主/受
主/動/有情/t - 非主/受/非情/T (能動文)	*!		
☞主/受/非情/T - 非主/動/有情/t (潜在的受影者・属性叙述受動文)		*	*

出力例

- (a) *「泥棒が大切なお金を盗んだ」
 (b) 「大切なお金が泥棒に盗まれた」 (=2b)(潜在的受影者動文)

(17) 推計学的評価において「*主/非情」が優位を占める場合

V(動/有情/t, 受/非情/T)	*主/非情	*主/t	*主/受
☞主/動/有情/t - 非主/受/非情/T (能動文)		*	
主/受/非情/T - 非主/動/有情/t (潜在的受影者・属性叙述受動文)	*!		*

出力例

- (a) 「泥棒が大切なお金を盗んだ」
 (b) *「大切なお金が泥棒に盗まれた」 (=2b)(潜在的受影者動文)

もちろん、(16a)、(17a)の能動文を用いても、その真理条件的意味によりお金の所有者が迷惑を受けたという意味合いが全く読み取れない訳ではないので、一見これでもいいかもしれない。しかし、次節では、有標な受動文が用いられているからこそ明白な推意が派生するという仮説が OT でいかに形式化できるかについて考えることにするので、「*主/t」が事実上絶対的に「*主/非情」や「*主/受」より優位を占めるか、推計学的評価の結果によって、潜在的受影者の受影性(あるいは主語の属性に関する含意)を明白に表すために話し手が別の手段を用いなければならない場合があるかのどちらかを仮定しなければならない。本稿では前者の仮定を採ることにする。結果として、動作主と受動者の一方の主題性が他方のそれを有意に上回らない場合にのみ、影響の強さが個別の制約の順位値として慣習化した他の有標性要因が態の選択に影響することになる。

4.2 潜在的受影者受動文と属性叙述受動文の解釈

潜在的受影者受動文と属性叙述受動文のそれぞれの含意が受動化に伴う真理条件的意味の変化によるものではないとすれば、いかに聞き手に伝わるのだろうか。上で述べたように、文脈に明示的に表されていないならば、推意として伝わると仮定するが、本節では聞き手が話し手による受動態の使用を手掛かりにどのように推意を導き出すかについて考えてみたい。前節で受動態のこのような使用が非情物受動者の高い主題性によるとしたので、ここではまず、他の有標性要因でなく主題性が受動態の使用の原因であることが聞き手に伝わり、文脈においてその非情物受動者の主題性を裏付ける情報的内容がなければ、話し手に推意的意図があったと聞き手が判断し、文の内容から適切な推意を導き出すと仮定する。つまり、ここで問題になるのは、文脈において受動者の主題性を裏付けるものがない場合、他の有標性要因でなく主題性が受動態の使用の原因であることがどのように聞き手に分かるかである。

一つの方法は、解釈過程の語用論的部門を双方向的最適性理論 (Bidirectional OT—以下 BiOT) でとらえることである。BiOT とは、形式の生成過程において解釈過程も参照されるという仮定か、解釈過程において生成過程も参照されるという仮定か、あるいはその両方の仮定を含む複数の枠組みの総称である。BiOT 的枠組みとしてどのようなものがあるかについては、Blutner & Zeevat (eds.) 2004(その中で特に Beaver & Lee 2004) と Benz & Mattausch (eds.) 2011 が詳しい。本節で扱う種類の受動文の解釈過程における双方向性の必要性は、聞き手が文を処理するとき、その文が生成過程においてどの情報的内容に対応する最適な形式であるかを考えなければ文の有標性による推意の派生が不可能であるということによる。無標な解釈が正しければ話し手が無標な形式を選んだはずなのに有標な形式が用いられているため、聞き手が有標な解釈に到達すると考えるのである。日本語において受動文から推意が導出される場合とそうでない場合の解釈過程を Zeevat (2000: 第 5 章) の枠組みで分析すれば、次のようになると仮定できる¹¹。まず、解釈過程も OT 的過程であって、聞き手が入力形式に対して、理論上無数の解釈の候補から最適な解釈を出力として選ぶとする。そして、ある文の解釈過程では、解釈の候補の集合から、生成過程の入力にすればその文が最適な形式として出力されない解釈がまず排除される。残る候補から

¹¹ ここでは解釈過程に注目するが、生成過程にも双方向性がある可能性ないし必要性は一切否定しない。むしろ、前節で述べたように非情物受動者についての推意的意図があるにもかかわらず推計学的評価の結果として能動文が最適な出力になる場合があるとすれば、その能動文で意図の推意を伝達することの不可能性に話し手が気づき、その情報を伝達するために他の手段を用いることには双方向性が必要であろう。また、3.3 節で参照した Jaeger (2004) の制約部分階層の習得とそれを含む文法の通時変化のモデルも双方向性を用いる。

は、解釈制約を用いた評価を経て、最適な解釈が出力として選ばれる。Zeevat が提案する解釈制約の中では、形式の真理条件的意味や文脈への聞き手による追加を禁じる*INVENT が正当でない推意の導出を防ぐことに役立つ。

では、例として、潜在的受影者受動文の解釈過程(18)をそれに対応する能動文の解釈過程(19)と比較しよう。述語項構造で表す真理条件的意味と推意的意味を併せた解釈の候補を I_i で表す。この例では、文の真理条件的意味を完全に反映させない解釈の候補は省略する。実際には、そのような候補も解釈過程の双方向性によって排除される。また、この例では、どちらの参加者も文脈において高い主題性を持たないとする。結果として、推意を含む候補においてのみその推意の主題と見られる参加者が高い主題性を持つことになる。

(18) 「大切なお金が泥棒に盗まれた」 (=2b)の解釈過程

- I_1 : {V(動/有情/t, 受/非情/t)}
 I_2 : {V(動/有情/T, 受/非情/t), 動作主についての推意}
 I_3 : {V(動/有情/t, 受/非情/T), 受動者についての推意}
 I_4 : {V(動/有情/t, 受/非情/t), その他の推意}

OT 統語論の評価では、有標性要因の制約によって、 I_1 、 I_2 、 I_4 は能動文が最適な形式となるので、 I_3 だけが解釈制約によって評価され、必然的に最適な出力となる。

「大切なお金が泥棒に盗まれた」	*INVENT
☞ I_3 : {V(動/有情/t, 受/非情/T), 受動者についての推意}	*

(19) 「泥棒が大切なお金を盗んだ」の解釈過程

- I_1 : {V(動/有情/t, 受/非情/t)}
 I_2 : {V(動/有情/T, 受/非情/t), 動作主についての推意}
 I_3 : {V(動/有情/t, 受/非情/T), 受動者についての推意}
 I_4 : {V(動/有情/t, 受/非情/t), その他の推意}

OT 統語論の評価では、有標性要因の制約によって、 I_3 は受動文が最適な形式となるので、 I_1 、 I_2 、 I_4 だけが解釈制約によって評価される。

「泥棒が大切なお金を盗んだ」	*INVENT
☞ I_1 : {V(動/有情/t, 受/非情/t)}	
I_2 : {V(動/有情/T, 受/非情/t), 動作主についての推意}	*!
I_4 : {V(動/有情/t, 受/非情/t), その他の推意}	*!

これはいわゆる「部分的ブロッキング」(partial blocking)という現象の例である。ある状況下では、受動文の最も無標な解釈の I_1 が、その状況でより無標である

能動文の存在によってブロックされる。その状況では、有標な解釈の I_3 でのみ受動文の使用が許容される。この場合は、その有標な解釈は受動者についての推意を含む解釈である。また、このような解釈過程を想定すれば、推意を含まずに受動文が最適な形式となる状況にもかかわらず話し手が能動文を用いる場合は、その能動文の主語の指示対象についての推意が派生することになる。これは望ましい結果であると思われる。

上の例は、主題性以外、考慮に入れている有標性要因の意味役割と有情性が両方とも能動文の形式的最適性をもたらすのでうまくいくが、動作主と受動者のそれぞれの特徴が能動文も受動文も推計学的評価において最適な形式になり得るようになっていけば、話し手が伝えようとした推意を聞き手が導出しなかったり、話し手が意図しなかった推意を導出してしまったりする可能性が出てくる。すなわち、話し手が行う形式候補の評価の結果と聞き手が双方向的解釈過程において行う生成的評価の結果とが一致しない場合があり得る。能動文が最適となる確率と受動文が最適となる確率が 50% に近づければ近づけるほど、伝達が正しく成立しない確率が増すと予測される。これも望ましい結果なのか、今のところ判断しかねるが、一応、推意の伝達が必ずしも誤解なく成功する訳ではないという我々言語使用者の日常の経験とは食い違わない¹²。

4.3 ニヨッテ受動文について

最後に、ニヨッテ受動文についても簡潔に触れたい。次の例から分かるように、ニ受動文とニヨッテ受動文には、それぞれ異なる成立条件がある。

- (2) (a) *開会が議長に宣言された。
(20) 開会が議長によって宣言された。 (井上 1976: 83)
(21)(a) 花子は近所の子すべてにいじめられた。 (Kamio 1989: 95)
(b) ??花子は近所の子すべてによっていじめられた。 (同上)

(20)に示されるように、非情物主語のニ受動文が成立しない場合でも、対応するニヨッテ受動文は許容される。そして、(21)に示されるように、ニヨッテ受動文は、ニヨッテでマークされる名詞句の指示対象の動作による主語の指示対象の状態変化が含意されなければ成立しないとされる(細川 1986: 124, Kamio 1989: 97, 100)。第1章で挙げた前提と並行的に、経済性のために、ニ受動文とニヨッテ受動文の違いについての次の前提と両立する説明が望ましいと思われる。

¹² 解釈における確率の役割について、ペイズの解釈と OT を扱う Zeevat (2011) の考察が興味深い。

- (xiv) ニ受動文とニヨッテ受動文の成立条件が異なることは、表層構造において異なるもの、つまり、二名詞句とニヨッテ句の性質の違いにのみ起因する。

次の説明¹³は、OT でも形式化しやすい。すなわち、ニヨッテ句が項ではなく付加詞として機能する(松下 1930、金水 1991, 1992, 1993)、原因あるいは使役者を表す副詞句であると仮定し、ニヨッテ受動文が厳密には短縮受動文(short passive—能動文の主語の指示対象に対応する参加者が明示されていない受動文)の一種であるとする。(21)に見られる適格性の差は、原因あるいは使役者を表す「によって」の語彙の意味が状態変化を含意しない「いじめる」の意味と相容れないことに起因するというふうに説明する。そして、(2a)と(19)の適格性の差は、ニヨッテ受動文を短縮受動文として扱うことで説明できる。短縮受動文は、OT の評価において、動作主も受動者も項として指定されている入力ではなく、受動者のみが指定されている項構造の入力に対応する最適な出力として生成されると仮定する。推計学的 OT の評価において「*主/非情」が本稿で扱った他の制約のいずれよりも優位である場合でも、日本語ではどの文にも主語(ゼロ主語を含む)があることに基づいて主語のないことを防ぐ制約がさらに優位であるとすれば、そうした入力の評価表が次のようになる。制約は Grimshaw & Samek-Lodovici (1998) にならって SUBJECT と呼ぶことにする¹⁴。

(22) 短縮受動文・ニヨッテ受動文

V(受/非情)	SUBJECT	*主/非情	(その他)
非主/受/非情 (主語のない能動文)	*		(…)
☞主/受/非情 (受動文)		*	(…)

出力例

- (a) *「開会を(議長によって)宣言した」(ゼロ主語もない解釈で)
 (b) 「開会が(議長によって)宣言された」

こうした入力は、項が一つしかなく、その項が受動者であるため、能動文が最適な形式になれない。たとえ受動者が主語として有標な非情物であっても、やむを得ず受動文が成立するのである。ニヨッテ受動文は、こうした短縮受動文

¹³ 詳細については、トート 2012 を参照されたい。

¹⁴ Ackema & Neeleman (1998) は統率束縛理論 (Government and Binding Theory) の拡大投射原理 (Extended Projection Principle) に基づいて EPP という OT 制約を提案している。

にニヨッテ句を挿入したものであると考える。つまり、ニヨッテ受動文は、動作主が状態変化の引き起こす「使役者」などの間接的参与者とも解釈できる場合にのみ、それを付加詞として含む入力に対して出力されるものであると考えることができる。

5 おわりに

本稿では、日本語における能動態と受動態の間の選択の OT 的形式化の可能性について論じた。特に非情物主語のニ受動文のしばしば持つ特殊な含意の推意的扱いについてはさらなる研究が必要であるものの、Bresnan, Dingare & Manning の英語の分析の基本が日本語にも適用できることは示せたと思う。なお、その含意を推意として扱うことが適切であるとすれば、逆に、それを成立条件がニ受動文と類似する(高見 1995: 40-64)英語の擬似受動文(pseudopassives—前置詞句から名詞を取って主語とする受動文)にも適用できる可能性がある。

謝辞

本稿は、筆者が平成 24 年度川嶋章司記念スカラシップ基金の奨学金及び平成 25 年度文部科学省の国費留学生の奨学金を頂いて書いたものである。この場を借りて深謝の意を表したい。

参考文献

- 井上 和子 1976 『変形文法と日本語 上・統語構造を中心に』 大修館書店
 金水 敏 1990 「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学 国文篇』41, 27-56
 金水 敏 1991 「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164, 1-14
 金水 敏 1992 「場面と視点 —受身文を中心に—」『日本語学』11:8, 12-9
 金水 敏 1993 「受動文の固有・非固有性について」『近代語研究 第九集』
 近代語学会(編) 473-508 武蔵野書院
 久野 暲 1978 『談話の文法』 大修館書店
 久野 暲 1986 「受身文の意味 —黒田説の再批判—」『日本語学』5:2, 70-87
 高見 健一 1995 『日英語対照研究シリーズ 4 機能的構文論による日英語
 比較』 くろしお出版
 トート・ルディ 2011 「非情物主語のニ受動文—関連性に基づく分析へ」
 『京都大学言語学研究』30, 107-45
 トート・ルディ 2012 「ニヨッテ受動文についての一考察 —ニ・ニヨッテ受動文の
 統一的な分析に向けて—」『京都大学言語学研究』31, 181-209
 細川 由起子 1986 「日本語の受身文における動作主のマーカ—について」
 『国語学』144, 113-24

- 益岡 隆志 1982 「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82, 48-64
(益岡 1987 に改訂収録)
- 益岡 隆志 1987 『命題の文法 —日本語文法序説—』 くろしお出版
- 益岡 隆志 1991a 『モダリティの文法』 くろしお出版
(受動文についての章は益岡 1991b としても出版)
- 益岡 隆志 1991b 「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』
仁田義雄(編) 105-21 くろしお出版
- 益岡 隆志 2000 『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 松下 大三郎 1930 『標準日本口語法』 中文館書店

- Ackema, Peter & Ad Neeleman. 1998. 'Conflict Resolution in Passive Formation'. *Lingua* 104, 13-29.
- Aissen, Judith. 1999. 'Markedness and Subject Choice in Optimality Theory'. *Natural Language and Linguistic Theory* 17:4, 673-711. (Aissen 2001 としても改訂収録)
- Aissen, Judith. 2001. 'Markedness and Subject Choice in Optimality Theory'. Legendre, Grimshaw & Vikner (eds.) 2001: 61-96.
- Aissen, Judith. 2003. 'Differential Object Marking: Iconicity Vs. Economy'. *Natural Language and Linguistic Theory* 21:3, 435-83.
- Beaver, David & Hanjung Lee. 2004. 'Input-Output Mismatches in Optimality Theory'. Blutner & Zeevat (eds.) 2004: 112-53.
- Benz, Anton & Jason Mattausch (eds.). 2011. *Bidirectional Optimality Theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Blutner, Reinhard & Henk Zeevat (eds.). 2004. *Optimality Theory and Pragmatics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Boersma, Paul & Bruce Hayes. 2001. 'Empirical Tests of the Gradual Learning Algorithm'. *Linguistic Inquiry* 32, 45-86.
- Bresnan, Joan, Anna Cueni, Tatiana Nikitina & R. Harald Baayen. 2007. 'Predicting the Dative Alternation'. *Cognitive Foundations of Interpretation*, ed. by Gerlof Bouma, Irene Krämer & Joost Zwarts, 69-94. Amsterdam: Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences.
- Bresnan, Joan, Shipra Dingare & Christopher D. Manning. 2001. 'Soft Constraints Mirror Hard Constraints: Voice and Person in English and Lummi'. *Proceedings of the LFG 01 Conference*, ed. by Miriam Butt & Tracy Holloway King, 13-32. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Bresnan, Joan & Jennifer Hay. 2008. 'Gradient Grammar: An Effect of Animacy on the Syntax of Give in New Zealand and American English'. *Lingua* 118:2, 245-59.
- Givón, Talmy. 1983. 'Topic Continuity in Discourse: An Introduction'. *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, Talmy. 1995. *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

- Grimshaw, Jane & Vieri Samek-Lodovici. 1998. 'Optimal Subjects and Subject Universals'. *Is the Best Good Enough?*, ed. by Pilar Barbosa, Danny Fox, Paul Hagstrom, Martha McGinnis & David Pesetsky, 193-219. Cambridge, MA: MIT Press & MIT Working Papers in Linguistics.
- Jäger, Gerhard. 2004. 'Learning Constraint Subhierarchies: The Bidirectional Gradual Learning Algorithm'. Blutner & Zeevat (eds.) 2004: 251-87.
- Kamio, Akio. 1989. 'A Semantic and Pragmatic Analysis of the Japanese Passive'. 『受動構文の研究 昭和 62-63 年度文部省科学研究費補助金 研究成果報告書』 齋藤武生・神尾昭雄(研究代表者) 91-112 筑波大学現代語・現代文化学系
- Kitagawa, Yoshihisa & Sige-Yuki Kuroda. 1992. *Passive in Japanese*. Unpubl. ms., v. 5.2.
- Kuno, Susumu. 1976. 'Subject, Theme, and the Speaker's Empathy—A Reexamination of Relativization Phenomena'. *Subject and Topic*, ed. by Charles N. Li, 417-44. New York, NY: Academic Press.
- Kuno, Susumu. 1990. 'Passivization and Thematization'. *On Japanese and How to Teach It: In Honor of Seiichi Makino*, ed. by Osamu Kamada & Wesley M. Jacobsen, 43-66. Tokyo: The Japan Times.
- Kuroda, Sige-Yuki. 1979. 'On Japanese Passives'. *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, ed. by George Bedell, Eichi Kobayashi & Masatake Muraki, 305-47. Tokyo: Kenkyusha. (Kuroda 1992 にも収録)
- Kuroda, Sige-Yuki. 1992. *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*. Dordrecht: Kluwer.
- Legendre, Géraldine, Jane Grimshaw & Sten Vikner (eds.). 2001. *Optimality-Theoretic Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Legendre, Géraldine, William Raymond & Paul Smolensky. 1993. 'An Optimality-Theoretic Typology of Case and Grammatical Voice Systems'. *Proceedings of the Nineteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 464-78. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.
- Nakamura, Wataru. 1999. 'An Optimality-Theoretic Account of the Japanese Case System'. *Studies in Language* 23:3, 597-649.
- Rosenbach, Anette. 2008. 'Animacy and Grammatical Variation — Findings from English Genitive Variation'. *Lingua* 118:2, 151-71.
- Samek-Lodovici, Vieri. 2001. 'Crosslinguistic Typologies in Optimality Theory'. Legendre, Grimshaw & Vikner (eds.) 2001: 315-53.
- Zeevat, Henk. 2000. 'The Asymmetry of Optimality Theoretic Syntax and Semantics'. *Journal of Semantics* 17:3, 243-62.
- Zeevat, Henk. 2011. 'Bayesian Interpretation and Optimality Theory'. Benz & Mattausch (eds.) 2011: 191-219.
- Zeevat, Henk & Gerhard Jäger. 2002. 'A Reinterpretation of Syntactic Alignment'. *Proceedings of the 3rd and 4th International Symposium on Language, Logic and Computation*, ed. by Dick de Jongh, Henk Zeevat & Marie Nilssenová. Amsterdam: ILLC Scientific Publications.

On the Possibility of an OT Analysis of the Japanese Voice System

Rudy Toet

Abstract

In these notes, I consider the possibility of analysing part of the Japanese voice system using the machinery of Optimality Theory. I specifically focus on the choice between active and passive voice for two-place predicates. The idea that differences in relative markedness between certain assignments of grammatical roles to arguments, depending on the properties of these arguments, influence the acceptability of actives and passives is used to explain the peculiar restrictions on the use of the Japanese *ni*-passive. Bresnan, Dingare & Manning's (2001) cross-linguistic analysis of voice, using Stochastic OT, is argued to be compatible with the explanations offered for these restrictions, and Bidirectional OT is considered as a tool for modeling the derivation of the implicatures that seem to necessarily arise in some cases when *ni*-passives with inanimate subjects are used. Finally, I briefly touch upon *ni yotte*-passives, which can be used freely with inanimate subjects even when the corresponding *ni*-passives are unacceptable. I argue that treating nouns marked with *ni yotte* as adjuncts causes *ni yotte*-passives to be optimal output candidates for inputs that differ from the inputs that lead to two-place actives and *ni*-passives; namely, inputs with only the patient specified as an argument.

受領日 2013年10月9日
受理日 2013年12月11日